

商業の基礎概念について

細野 孝 一

- 一 ま え が き
- 二 商業の生成
- 三 商業の具体的概念
- 四 商業本質論についての批判
- 五 商業の生産性

一 ま え が き

この頃の経済理論で、また経済政策で痛感していることは、その基盤に哲学的思惟の欠けていることである。時には人間不在の経済論さえ大手をふってまかり出る。せめて認識論を今いち度ふり返って、われわれの思考の内容は、すなわち知識とは何か、その知識の普遍性必然性はどういうものかを、同時にまた認識論（知識）の起源について一寸考えてもらいたいものだと思う。

今に始まったことではないが、学校で教えられた経済学が現実社会で役立たないとよく批判される。経済理論が現実に合わせている。あまりにも多くの重要な要因を捨象して、勝手な抽象化を進めて観念世界を築きあげている

からでなからうか。時には唯物論だけで割切る。人間の生活を離れて資本の法則が先在しているように説かれもする。なんのための経済学であったかを反省してもらいたい。

成功した自然科学に魅せられて、これに真似て経済学を基礎付けようとする試みも行われる。自然科学と人文科学の基本的な違いを始めから無視してかかるとする。近年流行し始めた計量経済学はその一つかも知れぬ。数の範疇にいれることによって普遍妥当性を持たせようというのであるが、その結果は、数学の応用せられる範囲の思考だけの妥当性で、その利用される数式にしても現実世界の一面を表象したに過ぎないもので、陰陽の範疇によって一切の事象変化を見ようとする易の符に似たようなものである。それがそのまま現実世界に適用されるものでない。

ここで問題にしようとする商業についてもその本質さえうやむやにして、時には架空的な実体論まで飛び出すことがある。商業とは何かさえあまり考えないで、商業無用論が主張されることもある。商業は私の専門分野でない。しかしその基盤がわが国の経済学者の多くによって否定されようとしているのを見るにつけ、また経済学が人間の経済と離れた抽象世界を対象とするものが多くなった昨今の傾向を見て、敢えて、商業概念の基礎固めによって商業無用論を排し、人間不在にならない経済学再建への一助にしたいと思う。

二 商業の生成

元来人間はその目的状態において、その操作は自然交換に編入されるが、それによって自然交換の新たな場を生ずる。たまたまその場がヨリ適応的になることもあるが、人間はそうした自然交換を人間目的に利用することを知って

目的人間に発展したともいえる。現に、大自然に働きかけて生産物を作り、その生産物を消費して生活することによって、人間は自然交換を続けている。人間の叡智は大自然を征服し、科学の進歩で宇宙を再編成するようにも考えているかも知れぬが、それは無限の宇宙に対する粟粒程の小さな一瞬の出来事に過ぎず、結局人間は何一つとして大自然に対し新たに付加するものもなく、また減耗するものもないのである。それは商業であろうが、工業であろうが、また農業であろうが同じことである。同時に、人間の社会的組織が進化し複雑化すればする程、人と人との結合には、媒介し媒介せられる関係を必要とし、それによって進展してゆくものである。

原始時代の経済が自給自足の経済であったことは想像に難くない。それが物々交換の経済に発展した訳であるが、交換が始まると分業もまた次第に促進される。しかしてその交換によって、交換の両当事者は各々より大きい効用を得たことによって満足するだろう。すなわち、財貨の使用価値は交換によってより大きくなる。しかし直接交換には種々なる不利不便を伴う。相手を見付けることが容易でないし、見付かっても量がうまく合致するとは限らない。しかも物によっては分割することのできないものもある。この困難を克服するためいわゆる物品貨幣が現われた。すなわち流通性の大きい財貨が交換の媒介をするに至った。ここに直接交換は間接交換に進む。さらに進むと、いわゆる貨幣が一般的媒介手段となるが、ここに貨幣経済は次第に整備し、社会的分業は益々進む。同時に生産と消費の社会的分離は益々甚だしく、この両者を結ぶ媒介者を必要とするに至るのである。

貨幣の生成によって間接交換時代にはいると、従来の個別的な自家消費のための耕作とか手工は次第に独立して、いつしか農業・工業といわれる社会的分化を生じたのではなからうか。市場経済をも発達させる。もちろん農業・工

業というも、便宜的な名称に過ぎなからうが、こうした社会的分業に基ずく生産者間、または消費者との間にも色々な意味あいでの溝を生ずることとなる。生産者または消費者が自分でできないとすれば、誰かがこの溝の舟渡しをしなければならぬ。すなわち媒介者を必要とする。この舟渡しをすることを業として行なう社会的分業の結晶が、いわゆる商業の発生にあつたのではなからうか。

繰返し説明するに、貨幣経済の発達によつて分業は益々進み、生産者間またはそれと消費者との間のあらゆる意味での溝は拡大する。しかして工業等における余剰生産物は、消費者の手に渡つて消費され、あるいは利用されなければ価値はない。この両者を結びつける媒介的機能の形成が商業の生成であるが、あるいは農業工業の分化と殆んど同時的に発生したものかも知れぬ。あるいは当初はいわゆる農工での生産者が、その生産した財貨を直接消費者に手渡し、生産者と消費者との専門的媒介者はなかつたかも知れぬ。しかし少なくとも生産と消費との隔離は、財貨が自動的に動くものでない以上、誰かが舟渡しして結合に当らねばならぬ。この媒介的機能を職として担当することになったのが商業である。その機能は単に場所的時間的な調整だけでなく、量的質的にも、さらに関係的および様式的な分野にも及んで調整するところのものである。市場経済の発展に伴つて、貨幣と同じように商業は、かく交換の媒介を職能とするに至つたが、しかし貨幣による交換媒介に関連するすべてが商業の分野だという訳ではない。貨幣が交換の媒介をしても、商業機能としての媒介を必要としないことも多い。非商業的分野で、貨幣が交換の媒介をしていることは少なくない。

商業の起源に関して熊沢蕃山は次のように説いて、商業は財貨の交換に始つたといっているのは、同じような意味

合いかからかも知れぬ。「聖人、天下の民を見たまふに、有余あり、不足あり。生の養ふの道全からず。……是によりて、日中に市をなし、天下国々所々に於て人を聚め、有るところの物を以て、無きところのものに換へて、各々其生を養ふことを得せしめ玉ふ。五穀ある者は魚なし。魚ある者は五穀なし。交易するときは互に用を達す。農業を事とするものは、鋤鎌を造るに暇なし。鋤鎌を造る者は耕作を兼ねること能はず。故に農人は易をも五穀を以てし、鍛冶は農具を造りて、互に交換して、各其所を得たり。万物皆如此。又農人、職人、自ら来つて易ふるに暇なし、商人、之を買取て相通ず。」（集義和書卷第七）。ここでの聖人を摂理というようなものに読みかえると、商業は人間社会の発展過程での歴史的生成物だとも理解できよう。

なお、享保宝歴の頃のものといわれる商家心得草には、工業と商業とを比較対象し、工業は衣住に必要な財貨を製作するものだとその種類を列举するが、商業についてはその本質を以って財貨の交換の媒介にあると説き、財貨の交換を仲介して利益を得るには豊富な機略を要すると次のように述べる。（中村孝也『経済思想の研究』p.418—422）。「然るに凡て商業を営むものは、是等の品々は云ふも更なり。（工業で列举した品々を指す）。凡て海内国々に産出する所、且、異国の珍奇に至るまで、余さず漏さず貯へ置て、衆人の求めに応じて是を売出す也。至如衆人の好む処区々にて、千差万別なり。又四季に用ゆる所の品も替れば土地の好々も、亦、替れり。是の如く千変万化とかはる人情に従ひて、いづれも事の闕けぬやうに停貯（かいおけ）ば腐敗貨物多く出来るなり。故に之を考へて少し買置けば、まさか入用の時、俄に間に合はず。剩へ相場折々狂いて、或は貴くなり、或は賤くなりて、暫くの中に損益もある事なり。是みな氣運の然らしむる所にして、何れを是とも何れを非とも定め難し。是故に、売買の機会違へば、貴き時に

買入れたる物を、賤き時に售るやうに成り行くなり。是の如く商人の治生は煩多にして、農や工の画一の守りとは格別なる者なり。……」と。今日指適されている商業機能の主體的なものが面白く表現されている。

これらによってみるも、商業の発生的前提には社会分業の行われていることが必要で、また既に貨幣経済にはいつているものと考えられる。そこでの生産と消費の溝は交換の媒介によって解消するが、それは自動的には調整されない。その交換の一面の現象は生産者側からいえば売行為であって、また他端の消費者側に立ってみれば買行為といった面を法律的解釈からは生ずるが、こうした売行為買行為を結びつけて考える経済的見解からすれば、両者を結合する所の媒介機能が浮び、これが商業の本源的機能だと考えられる。すなわち交換の媒介をする商業の立場から見れば、一方で買行為、他方で売行為があるもので、商業は生産と消費を結ぶ過程の全部または一部を結ぶことを業としているのである。その場合に対象となって取扱われる財貨を商品という。要するに商品の生産者から消費者への流れに関係した機能に商業に存立する。今日の自由経済の下ではこの機能は商人または商企業によって遂行されるが、たとえば商業と商人または商企業といった対立的概念のものでなく、次に説明するように商業概念のうちに商人や商企業の機能は含まれているのである。商業を離れて商人や商企業の機能はなく、また商人や企業を離れて商業機能は考えられない。両者は前後、表裏といったものと同様な抽象的概念である。

三 商業の具体的概念

われわれが生活している現実社会が唯一の實在だという認識に立脚して考えたい。この現実社会は大自然の一部

で、自然交換の一部を構成している。そこでわれわれ人間は機能的に自然循環を続けるが、その過程において色々な経験をするのである。経験の組織されたものを概念というが、その捕え掴む過程が先ず問題となる。われわれが経験するということを、丁度鏡が物を写すように、先ず、所与としての外物があって、その刺戟によって意識内に心像が作られると考えよう。その心像を表象というが、経済学でいう現象もその一つである。心理学ではこうした表象とか現象をつくる作用を知覚という。もともとわれわれの意識外に超越して存在しているものを思惟することはできないから、表象といい、また現象というも意識内のもの、すなわち「われわれのもの」である。しかもそれ等は個々別々のもので、時間的空間的に並存し、なんの連絡も関係もないものである。その意味では知識の材料である。そうした知識の材料である現象を所与として思惟は反省する訳である。すなわち現象（表象）として捕えた所のものを掴みなおすのが思惟で、思惟せられたものが概念である。机の上に本があると認識すれば単に知覚するだけのことでなく、すでにそれ以上のもので、机も本も既に概念である。思惟は表象（現象）を概念化する働きであるが、同時にわれわれの思惟は概念を対象としているもので、われわれが実在を考えるのも実は概念で考えているのである。

商業の研究というような人文科学、特に経験科学での認識の出発点は、われわれに経験せられる所の具体的な現象である。われわれの目に映ずるもの、知覚されるものは、商品の流れあるいは売買またはそこでの商人の活動といったもの、すなわち商品の流れに伴う諸現象であるが、そうした具体的現象を離れて商業の本体が宙にあるとは考えられないが、そうした現象は商業概念によって組織され、またそれらの概念を対象として思惟されているのである。「ある現象がある」と見ることは既に思惟の加わった作用的のもので、また思惟せられるものは前に述べたように概念で

あるが、そこで捕えられる方法の深淺というか、組織される仕方によって以下述べるように概念を三つに分けることができる。(紀平正美著「論理学及哲学の基礎概念」p.43—63)。

なぜ概念を作る必要があるかは、事物を処理するに当って個々別々に一々記憶するよりは、概括的に捕えることが便利だからである。ハチ公だポチだ……と一々記憶するより犬という概念で先ず捕えることが必要である。一つの条件というか原理を定めて、これに適合するものを取りあげて、個別的なものを一括するのである。これを形式化して説明すると、AとBとを具体的な表象として、Aはa、b、cという特性が、また、Bは、a、b、dという特性があると見るとき、a bという共通的な特性で一括しようとするもの、このa bが概念である。個々の現象または表象に存在すると見られた一般的共通的な特性を抜き出して概念としたのであるから、この種の概念を抽象的概念という。

この種の概念の作成に当っては、一面で抽象せられると共に他面では捨てられる要素がある。抽象に対する捨象であるが、その概念にとって、なくてはならぬ性質であるいわゆる本質的性質(a b)とそうでない非本質的性質(c d)(個別的性質)とに分けられよう。すなわち、抽象的概念とはある見解(原理、条件)にしたがって本質的性質を抽象し、非本質的性質を捨象して、思惟によって作られたものである。概念の内包とは抽象せられた諸性質をいい、またそれによって表わされた個々のものの総体をその概念の外延と呼んでいる。内包を増すのを概念の限定といい、外延を増すのを総括というが、概念の内包を定めることが定義で、外延を精細に定めることを分類という。抽象的概念を扱う自然科学では、先ずその対象を規定する。観察実験でその上位概念(類)と従属概念(種)にしたがって分類するから、その対象は自から明らかとなる。かように科学とは思考内部の便宜的組織であるので、それは「意識内のも

の「すなわち「われのもの」との規定から脱していない。対象としてのものがあって、それから思惟が作りだしたものである。われのものであって対象自体でない。さきに述べた表象とか現象の域に止まるものである。

一般に知識とはある対象について知ることである。しかしその際、思惟することには一定の型がある。その型が、すなわち形式が範疇といわれる。抽象的概念は普遍であるが思惟が作りだしたもので「われのもの」であるが、「思惟の働きの形式」ということになる、主観性は脱却する。それは「われのもの」でなく、「思惟一般」のものであると考えられる。これを形式概念という。この形式（範疇）でものを批判し、また判断してゆくのである。範疇はその本来の意味は「言い表わす」ということで、アリストテレスは言い表わしの一般的なものをもって範疇と呼んだのであるが、カントは範疇を悟性の働きの限定し、悟性には一二の範疇があるとした。範疇をば悟性が概念を綜合して一判断とする働きと見たのである。しかし範疇をば思惟が与えられた項に綜合する型と見るならば、カントのように一二に限られるものではなく、「いはゆるから考えられるのだ」とすれば、すべての概念は範疇の働きを有する。すなわち概念の概念たる所以は「思惟の形式」であるという働きの上に存立する。

しかしさらに「われのもの」を完全に脱却して「思惟一般」のものでなくなれば、それはここでいう具体的概念となる。まさに形式概念は、抽象的概念と具体的概念の中間にあるものである。すなわち「思惟一般」のものを脱し、物に対する思惟といった対立を脱し、いわば承前起後の契機としての働きをもつものを具体的概念という。所与としてのもの、たとえば前後因果をば前後を生ぜしめ、物を生ずる真の本としての働きと考え、創造の力としてみれば、それは形式概念かりさらに進んだ概念となる。その概念は経験の組織に外ならない。完全に組織せられたもので、働

き且つ考え、また批判する力でもある。一切の対立をアウフヘーベンした現実の力である。商業の具体的概念においても同様である。

説明が少し横道にそれたが、商業は何であるかについては商業という具体的概念の働きによって把握されるものと信ずる。その概念は形式と内容とが一つになって働く所のもので、それ自らは商業に関連した経験の完全に組織されたもの、その一面はザインであると共に他面はゾーレンとなって働く所の契機としての働きをもつものである。ただ問題は、商業概念は確かに把握されているが、それがどんなものを明白に表示することの困難な場合が少なくない。他の概念についてもそうしたことは多い。概念が知らぬ間に不必要な特性を捨象して作られているからである。他人に笑われて捨象し、次第に概念が作られてゆくことも多いが、そのものの本質を現わし得ないような状態では完全な知識とはいえない。

抽象的概念の説明で、概念とは本質的性質を抽象し、非本質的性質を捨象して思惟によって作られたものだが、その本質とは「なくてはならぬ性質」、すなわち「そのものをそのものたらしめ、それ以外のものたらしめない性質」という訳である。ただ自然科学では一定された見解または条件にしたがって、内包外延の二方面の関係によって一連結として組織され、その内包を定めることによって定義も行われ、科学の対象も明らかとなるから簡単だが、商業のような人文科学の領域においては、何が商業の本質であるかは、すなわちそのなくてはならぬ性質は見解点によって相違するので、しかもそれが一定されていないから、そこが先ず問題になる。人文科学におけるなくてはならぬ性質はどうして見付けるかである。ここに自然科学で問題にされない本質論なるものが展開される訳である。

四 商業本質論についての批判

具体的概念の把握によってその機能も本質も明らかになるが、さらにこれを見方をかえて説明すれば、本質なるものの把握はその行なうところの機能によって把握されるのである。われわれの認識する現実の彼岸に永遠不変の本質があつて、この本体に本質を出発させるような考え方には賛成できない。本質の理解は丁度、貨幣の本質を求めて、*“Money is that money does.”*と説明されているのと同様である。貨幣の本質は貨幣の行なう所の機能によって理解されるもので、貨幣の機能を行なわないものはわれわれは貨幣と見ないのである。商業の本質もまた同様に、商業の機能によって把握されるのである。商業の本質というも機能というも実は一つのもので、内外の関係にあるもの、それは商業という具体的概念の働き自体に外ならない。その働きによって機能は理解されるが、そこに商業の本質も随伴しているのである。しかもその機能はわれわれが経験する現象を離れては存在しない。この点に関し、本間幸作氏は、その著「商業総論」において、「…個々の具体的現象が本質の帯有者なのである。個々の具体的現象を離れて、宙に本質が存在するのではない。現象には必ず本質がある」。(商業総論 p.76)。また本質と機能の関係についてはこれを抽象化して説明し、(同 p.79)、「本質と機能とは一つのものであつて、内面的に見れば本質、外面的に見れば機能といった関係にあるもの、人間が現象を理解するのはこの外面的機能を通ずることによって可能であろう。」と説明する。

かように商業の本質は機能を通じて知ることができるが、こうした考え方に反対する人も少なくない。た

たとえば森下二次也氏は「現代商業経済論」でかく主張する。(同 p. 36—37)。「およそ機能なるものは本質の展開としてとらえられるべきものであつて、その逆ではない。その機能をどれ程詳細に分析したところで、あるものの本質をとらえることはできぬ。」しかしそういう本質なるものが何を指しているかは、同書にはどこにも説明されていない。あえてそれから想像すれば、本質という非現実的なものが宙にあつて、これから展開されたものとして機能が存在しているかと推測される。そうだとすればいかに機能を分析しても、本質は彼岸の存在となるのである。もっとも「本質なんかどうでもいい、商業の本質なんて考えるのがおかしい、」という意味なら別に異論はないが、商業という抽象的概念においては、商業としてなくてはならぬ性質、すなわち本質的性質を抽象して形成されたものだが、所与たる現象に束縛されずに抽象の原理を無視してかかれば、いかようにも思惟を進ませることができ、勝手な議論もできるが、それでは詭辞の域を出ないのである。非科学的な推理だといわれても仕方がない。現象を離れ、機能を離れて商業の本質はなく、それと離れて商業の具体的概念の働きは考えられない。商業の生成以前に既に商業の本質が先在しているようなことは、認識論からは考えられない。もっとも森下氏はまた、「あるものの機能をいうためにはまずそのものの本質を把握し、その本質の展開としての形態をとらえなければならない。機能は形態でなければならないからである。そうするならば必ずや、ドイツの機能論者のすべてが見落し、ミスがなお不完全な形においてにせよ認識していた、商品流通における商人の売買に固有の特殊の機能が浮びでてくるであろう。これこそ真に商業の機能とよぶにふさわしいものである。」(同上 p. 64)とも述べている。ここでいう「本質の展開としての形態をとらえ」という本質は依然宙にかかっているが、ここでの本質を私のいう商業の具体的概念として解釈すれば全く理解で

きない訳ではないが、さらに「機能は形態の機能でなければならぬからである」というに至って、その形態は何を意味しているか説明もないから分り兼ねる。それを商業を営む商人と見れば、商業と商人で循環論にも陥る。しかし同氏はさらに、「商人の売買に固有の機能が浮びでてくるであろう。これこそ商業の機能とよぶにふさわしいものである」との結論からして推測すれば、矢張り商人の売買が形態かとも考えられるが、それを展開させた本質は依然として本体論のようなものになっている。何れにせよ「商人の売買に固有の特殊の機能」を認め、現実にはそれがスタートになっているようにも感ぜられるが、私のいう商業の具体的概念の働きからすればこの点だけに関しては別に異議を挟さもうとは思わない。それに先んじた部分は観念遊戯の道ぐさだったかと見ればそれまでである。

小牧、加藤両氏もその著『商業概論』(p.25)で次のように述べている。「商業は交換経済の一つの要素である社会的分業と、これにもとづく生産消費の分離、更にこれが発展致しまして、この生産と消費との距離をうづめます財貨の需要と供給の一致をはかる独立の分野が発生し、ここに商業のもつ社会的な機能が具体的なこの流通過程の一定の機関なり人なりによって担当されて参りました。しかもこの流通過程のうちにある機関といい人というも、ともにやはり自己の経済的利益、自己の欲望を、それを行なうことにより多く満足せしめんとして営む訳でありますから、このような営利的人間なり機関が行なう流通の機能が商であると思われます」と森下氏のいう所とあまり違わないようなことも述べている。両氏はさらに続け、「……これらの社会的機能は、技術的な面に於ても、もちろんこれを実際に担当する営利的な個人の行動によってのみ果たされるのでありますから、實際上の形の上では、これからの一切の機能は各個人の営利的な毎日の活動と行為に反映され結び合わされて、始めて商業という姿を表わすのであります」

という。私はここに述べた小牧、加藤両氏のはっきりした意見に一応賛成である。要するに商業機能によって商業の本質が把握されるといった迄で、本質は不変固定しているとは考えないし、その商業機能についても商人の売買活動にのみ限定している訳でない。フランクにいつて本質論なるものはあまり問題にしないでよいものかも知れぬが、それにしても現象の奥に位する本体、すなわち物それ自体 *Ding an sich* といったようなものの存在するという考え方には同感できない。機として働く商業の具体的概念のうちに商業の本質は把握されるのである。

話は少しそれるが、経済や商業の研究上であまりにも自然科学の方法論が強く影響していると思う。さきに触れた数理経済学もその一つである。元来自然科学は因果という範疇によって材料たる表象が組織せられたものである。しかし自然科学で用いられている所のものは機械的因果で、それは因果関係の一つであるがそのすべてではない。今日の科学的態度に立つ人々は因果を機械的なものと定めてしまったがため、その思考方法は目的論的考察と対立してこれを排斥する。すなわち共通的普遍性だけをとり、因果とい関係から「自己意識」といった要素を捨象し、量的外的条件としての関係だけを残し、いわゆる共通的普遍としての概念を組織したのである。商業問題についても同様、自己意識といった要素を捨象してしまっている。しかしエネルギーが外界に存在するというのも、自己内面において感ずる自己意識としての力をば、類推によって外界に投出したものに過ぎない。自然科学はその対象を人格的に見ることを嫌うが、そこで用いている大切な機械的因果法という範疇も、結局その根拠になっている所のものはわれわれの意志による行為と、その結果との連続関係を本とした類推に外ならないのである。有機物の考察では目的論は不可離である。(紀平正美著「論理学及哲学の基礎概念」p.183—4; p.124)。これこそ商業の研究上においてもかく見落されが

ちな重要な点の一つである。

自然循環をも人間目的に利用することを知って、人間社会は歴史的発展を辿ってきたが、そこに機能者としての人間が見出される。本間幸作氏のいうように、(同氏著『商業総論』p.80)、人間は複雑な機能者として、その機能の結果色々な社会制度を派生した。それは目的論的にのみ理解できるところのものである。商業は人間の行為に密着した現象であるが、これを総体としてみれば、すなわち抽象化すれば、個々の人間から離れた機能的な社会的な存在物で、それは一定の機能を行なうために人間によって創り出されたものである。だからその機能は目的を追求することになり、ここに機能は目的化する。抽象化すればこの通りであるが、私は商業の機能といひまた目的というも具体的概念以外の何物でもないと考える。

しかし商業のように人間の創りあげた社会制度は、人間の活動目的に支持されて歴史的に形成され発展してきたものであるから、逆にその活動目的に照らし目的論的に商業の機能も本質も把握できない訳でない。目的のうちに機能は発動し、そこに本質も把握されるからである。目的を無視して機能も本質も考えられないと本間氏は説くが(『商業総論』p.81)この三而一態としての商業の具体的概念の働きのうちに、商業のすべてが把握されるのである。

商業は貨幣と同じように歴史的な生成物で、個人意志と社会意志とが止揚された形において形成されているものである。分業の進むにしたがい物々交換の不利不便にたえず交換の媒介として貨幣が発生したのと同様、商業もまた分業の発達に伴い社会の各方面に生じた溝を舟渡しする必要からの生成であった。営利主義の今日の社会においては個人の営利に基づく行為がクローズ・アップされ、個人の利益のみを追求する個人意志に基づく被造物のようにも考えられる

が、商業の具体的概念からすればそれは一面的な見解に過ぎない。営利は派生的機能に過ぎない。目的論的に考えても明らかだが、商業は財貨の交換媒介の全部または一部を行なうことを業とするもの、こうした商業の本源的功能は社会的にか個人的にか行なっている筈である。商業は歴史的所産である。したがって商業は歴史の発展過程でその機能をつくす限りにおいて存続するものである。

また、商業の本質と機能について小牧、加藤共著「商業概論」では次のように説明する。「経済社会とは元来人間が経済財を以って欲望を満す為に相互依存的な関係を結ぶことを申しまして、ここには分業と協業というものが行なわれねばなりません……。この分業と協業ということは当然交換によって結びつかなければなりません。商業はこの分業と交換とを母体として発生したものでありますので、経済社会の歴史的変化のうちにおいてその時代の変化の影響を蒙り、その時代毎に商業の外観は異ってきたのであります。……この商業の外観的なもののみをとらえては、その本質の究明は出来ないであります。「商業とは営利の目的を以って購入したる財貨を販売する業である」という様な考え方を以って商業の本質とみるとき、営利を目的とするということだけでは、（資本主義経済では凡ての個別経済体が営利を追求しているもので、商のみに強調し本質とするのは不適當で）本質となすことはできませんし、また貨物の交換若しくは買入販売等ということは皆手段であって、そこに交換販売が何らかの目的と何らかの条件のもとになされているものでありますから、これを直接取りあげて商の本質なりとするなどは全く形式をながめて本質なりとする誤りと言わねばならないであります」（p.20—21）。これに対し本間幸作氏は「何故に営利目的と購入した財貨の販売とを分離して考察する必要があるか諒解に苦しむ。商は営利目的という主観的要素と再販売の為の

購入という客観的要素との対立的統一現象としてのみ把握すべきものである」(同氏著『商業総論』p.86)という。

小牧、加藤両氏はさらに続け「このように外観的形態だけを見たり或は商が実現される手段だけにとらわれたりして、それが本質だと思ふのはいずれも誤りだと言わねばならないと考えるのであります。そこで商業の本質については、これを形式的面或いは商業が実現される手段等についてみるのではなく、商それ自体が経済社会の変化と共に生成発展する事実をより一層歴史的に掘り下げて研究し、この経済社会のうちにおける商業の機能を本質の主要な性質としてとらえ、商業がそれ自身の生み出され維持されまた形づくられている経済社会の中において如何なる職能をもっているのか、その機能こそ、商がその生成時より今日も商としてある為の理由、言いかえれば本質の中心であろうと解釈すべきであります」(小牧、加藤共著『商業概論』p.21)という。私は、商業という具体的概念の把握が重要で、そこに財貨の媒介を業とする本源的機能、またそれから派生した幾多の派生的機能が時代によって出没していると考えるのである。それに伴い商業概念もまた変容し発展しつつあるのである。何れにせよ、機能によって同時的に本質の把握されることは当然で、この点、『自己意識』を捨象した自然科学の研究では、先ず本質が規定されることによって抽象的概念は形成されるが、人文科学においてもこれを真似ることによって本質問題の混乱を起しているのではないかと思う。

しかし小牧、加藤両氏はそのまま続けて次のように述べている(p.20—22)。「分業と交換はここに生産と消費を分散してしまったのでありますが、人間は生産者であると同時に消費者でなければなりません。……自己の生産せるものは自己一人では消費しきれず他人の力によらねばならず、また一方自己の消費は他人の生産せるものによらなければ

ばなくなるといふことは生産と消費の分離を意味し、そのままの状態では……全く人間としての生活を営むことが出来なくなってしまうのであります。……生産と消費は何らかの方法によって結びつけられねばなくなり、ここに財の交換による結びつけ（社会的結合）はなくてはならないものとなったのであります。この交換を通じ生産と消費の分離は、場所的にはもちろん、所謂人格的な面と呼ばれる需要と供給の面においても、その統一と調和が補完せられることになって始めて各人の経済生活は完全なものとなりうるのであり、生産と消費は各個別経済体の間に合理的に営まれ、経済生活の社会的均衡が確保されるに至るのであります。」という。ここまではそれ程異議を挟むようなこともないが、さらに「……社会的に全くばらばらな生産者と消費者が貨幣と価格を廻って自然に調整されてゆき、恰もそれが自然法であるかの様に次々に一つ一つの需要と供給の関係が価格に作用してゆき、最後に全体の供給と需要が一致するのであります。しかしこの生産と消費は全く別々の立場にある人々によって行なわれているのであります。……ここには何物かが、価格によって行なわれる財貨の流通のメカニズムを實際に担当して実現させるものがあるはずであり、このものこそが需給の一致をさせる作用をなしているわけなのであります。即ち価値を価格へ転換させ、交換を通じて生産と消費を結びつける作用をなすもの、それこそ商業であり、その作用こそ商の本質と称すべきものであります。」(p.23)。非常に興味深い説明の仕方だが、しかしこれによると需給を一致させ、また価値を価格に転換させているのは商業の作用であるようにも受取られる。需給の一致も、価格経済の形式も貨幣経済の機能を通じ経済社会全体としての働きから生じたもので、決して商業の作用だけからでないと思う。両氏はさらに、「すなわち生産と消費の人格的流通あるいはいかなる財貨がどれだけ社会的に必要とされるかという需要と供給の調

整、言いかえますと、生産のみである不完全なる人格の持ち主と、消費のみである不完全なる人格の持ち主とにそれぞれ消費と生産の調和と一致とを与え、本来の生産と消費の意味を完全なる社会経済人に実現せしめる機能が、ここでは商業という形に於て考えられるのであります。」(p.23)。これを文字通りに受取ると商業の機能は、生産にも消費にもまして偉大な力を持つものに考えられる。しかし商業は必ずしも生産と消費の調和や一致をもたらすものでない。商業が不調和の原因になっている場合もある。需給の調和と合致を与えることを目途として努力して働く所にいわゆる商業の機能は発現していると考ええる。

何れにせよ、こうした生産と消費間の社会的分離を克服しようとした機能は時代的にも変容し、社会の進展に伴い益々複雑化したのである。独立した生産と消費間の分離は、先ず場所的時間的なものから発し、次いで質的量的なものに及び、さらに社会の進歩は關係的また様式的な点にも拡大した。これに伴った商業の派生的機能は多元化し、時代によってそれぞれの特質が窺われる。すなわち商業の本源的機能は、原則として生産者の方から消費者の方へと商品を一貫的にか部分的にか舟渡ししていることのうちに見出されよう。重ねていうが、われわれの経済生活を対象として、社会的に財貨の場所的、時間的、量的、質的、關係的および様式的の調整と合致とを目途として働く機能のうち商業は認識されるのである。ここに商業の具体的概念の働きが把握される。よく組織された概念でこそよく組織する。組織する方面が形式(範疇)で、組織せられるものが知識の内容(材料)である。

五 商業の生産性

最後に商業の基礎概念について一言追加したいことは、商業過程では経済価値は造出されないという見解についての批判である。商業は効用を増大するから生産的だとか考える人々は、商業機能によって利潤は当然発生するものと考ええる。しかしそうした商業利潤の発生自体を否定するような見解はマルキストによって一般的に支持されている。商業は生産を行なうものでないから商業に対する正当な報酬は考えられないという。すなわち利潤の根拠を剰余価値のうちだけにおく。商人は生産から生じた商品の価値の一部分を分けてもらうだけで、すなわち剰余価値の一部が商業利潤として与えられているに過ぎないと見る。したがって基本的には、商業資本は本来産業資本の商品形態に属する機能を代理するに過ぎないと見る。したがって基本的には商業資本は本来産業資本の商品形態に属する機能に過ぎず、産業資本のもとでつくり出された剰余価値を産業資本から分与されたものだという。だから商業機能は価値的にはマイナス的なもので、そのマイナスの縮少という意味でプラスの作用があるに過ぎないという論理をも生ずる。

もちろんこうした見解の相違は、生産といった言葉の意味に発している。生産の意味を勝手に規定し、価値創出労働を物質的な彼等のいう生産面に限定して、自分勝手に定めた生産でないものは価値を生まぬといった独断的推理の誤謬をおかしているのである。農業というも昔の人々が考えていたように無から有を生むものでなく、工業も同様に形態を変えるだけで、本質的には商業における効用増大と変わらない。重ねていうが、畢竟人間は大自然に対して何

物も付加しないし、また減耗もしないのである。

人間生活の向上は自然の利用厚生を計ることにある。われわれの経済生活においては財貨の効用の増大が目的化されるだろう。効用の増大こそ真の生産だといえる。しかして効用の増大とは換言すれば使用価値の増加である。使用価値の増加は財貨の形態を変えることによって生ずることもあるが、また時には場所的・時間的な調整等によっても生ずることがある。今仮りに、誰かが自分のほしい物を持っており、同時に自分が手離しても差支ないと思う物をその人がほしがっておれば、ここに交換は容易に成立するだろうし、その交換によって両者は各々より大きい使用価値のものが与えられて、相互に満足する。条件の異った両者の交換によって、財貨の効用はそれぞれ増大する。貨幣が媒介とする商品交換の場合においても同様、交換の両当事者は原則としてより大きい使用価値を得たものとして双方が満足する。貨幣経済の下での商業機能は、貨幣による交換媒介の過程に見出されるのである。商人はその商品の仕入れの際にも、またそれを販売する際にも、相手側には原則としてより大きい使用価値を与えることになろう。換言すれば商品を他の生産者または消費者等へ舟渡しすることによって、商品のおかれた条件の変化から商品の効用は高められるのである。かく商業は原則とし使用価値を増大するのである。

財貨のおかれた条件を変化させることによってその効用を高めるが、人間はこの事実を知ることによってこれを目的化し、ここにいわゆる商業機能が発生したともいえる。商業は何をつくり出すかとの問いに対しては、その機能によって効用すなわち使用価値をつくり出すと答えたい。商業は農工業の剰余価値の分け前に参与するものとか、商業の費用は必要悪で、それを縮減するというマイナス面だけに意味があるという見方は、価値の創造を「生産」とい

う形態変化だけに限定した唯物主義の考え方の誤りである。

商業の生産性が問題になれば、繰返し説明したように使用価値を増大させるところに求められよう。財貨のおかれた条件を変化させることによって、人間目的からの利用厚生にヨリ一層資するからである。それは農業工業においても同様で、生産性の根源はわれわれが目的としている使用価値の増大以外にない筈である。今日の価値経済の下では、財貨の使用価値はヨリ大きい使用価値を表示する貨幣と交換せられ、それによってヨリ大きい使用価値の財貨が獲得される。したがって商業においても貨幣経済下でその経済性を測定しようとする際には、一般に使用価値を増大させることによって交換価値の上昇を促し、それによって獲得される貨幣量が増大することから、その収益性の大小というか、少なくとも商業で計算される付加価値の大きさを測定すべきものではなからうか。かくてその付加価値の大きさによって他の産業との生産性の比較も可能になるのである。